

# 理工系人材を確保するために



岡田 哲男

「チャイルドブランド」という語が20年程前、プロの将棋界で頻繁に使われていた。この語は、当時の将棋界を席卷しつつあった羽生善治、森内俊之、佐藤康光などの20歳前後の世代を指すものであった。彼らの世代は極めて層が厚く、現在まで20年以上にわたって将棋界に君臨し続けている。将棋に限らず、プロ野球、大相撲など多くの分野で極端に人材が偏る世代が周期的に現れる。勝負の世界では、結果として谷間の世代が割を食う。

化学の世界を見るとどうだろうか。やはり、人材の層が厚い世代と、それほどでもない世代がある。大学のある専攻で同時に複数の有力教授が定年になりその後任人事が大変などということはよく起こる。谷間の世代は研究費などで割を食っている、あるいはむしろ得をしているかもしれない。このような世代間の消長は普遍的なものでやむ得ないものとしても、全体として右肩上がりであれば、その分野の発展はない。多数の優秀な若手を引き込むことが必要であり、そのためには教育とともに普及活動が重要であることは言うまでもない。

理科離れを防ぐ手だてとして、小中学校での理科教員の増強が施策として打ち出されている。また、各種イベントで理科への興味を喚起する取り組みも広く行われている。このような正攻法とともに、理工系人材のキャリアパスを明示することが重要である。理系志望の高校生が、進学先の学部を選ぶ際、大きな決定要素になるのが卒業後の職業である。理工系よりも医歯薬系を志望する傾向が高くなっており、特に女子で著しい。後者はいずれも資格が取れる学部である。また、医学、歯学ではキャリアパスも明確であり、一般に高収入が保証される。優秀な医者が多いことは社会として望ましいことだが、今後の日本社会にとってこれは真に良いことなのだろうか。

生徒に理科の面白さを伝えるだけでは不十分で、理工系に進学するとどのような未来が開けているのかを本人だけではなく、その親、特に母親に示すことが有効だと、私は考えている。社会人の理系リテラシーの低さが日本社会の弱点である。後継世代を育てるために、親世代に理系の学術的意義を伝え、理解を求めることは重要であろう。しかし、それより、子供が理工系に進学し、その後どのような職を得て、どのように暮らしていくのかを見せることで、安心感と期待感を持たせることのほうが効果的である。母親は、子供の将来に大きな影響力を持つ。「将を射んと欲すればまず馬を射よ」。学会はこのような<sup>から</sup>搦め手作戦に適した人材が多数集まっている組織である。

一番良いのは理系人材が楽をして高収入を得ていることを数字で示すことだと思うが、現状はそうではない。地道な活動に頼らざるを得ないのは残念である。

[Tetsuo OKADA, 東京工業大学大学院理工学研究科, 日本分析化学会関東支部長]